世界救世教㋾之光教団　秋季大祭　教主様お言葉

於：救世会館

皆様、本日は秋季大祭おめでとうございます。

先程は、皆様を代表して〇〇さんが感謝奉告をご発表になりましたが、私どもにとって大切なみ教えである「浄化」の受けとめ方について述べられました。

私は、浄化とは、主神が、私どもの父母先祖の方々を始め、多くの方々を、赦され、浄められ、救われて、天国に立ち返ってきたものとして迎え入れるという浄霊のみ業を、私ども自身の心と体をお使いになって成し遂げてくださっているお働きであると思います。

ですから、私どもが病気になったり、いろいろなことで悩んだり、苦しんだりした時に、それらを「浄化」として受けとめさせていただくという、そのこと自体がいかに大きな救いの御用であるかということと同時に、その浄化という救いの御用にお仕えすることを通して、私どもは真（まこと）の主神の子となるべく養い育てられていることを改めて感じさせていただきました。

そして、私どもが「感謝奉告」をさせていただくということは、私どもが日々、見たり、聞いたり、感じたりしたことが、自分にとって都合の良いことであっても、都合の悪いことであっても、それらすべてを、主神が私どもの心と体をお使いになって成し遂げてくださったみ業として認め、その認めさせていただくことができた感謝の思いそのものを、明主様と共にあるメシアの御名にあって、主神の栄光として帰させていただくことであると思わせていただきました。

また、続いて、成井理事長より、㋾之光教団の新しい出発に向けての力強いご挨拶がありましたが、その中で、㋾之光教団としての教主補佐の発表があり、その発表を大変嬉しく受けとめさせていただきました。

ここに、㋾之光教団の皆様の真心とご配慮に心より感謝申し上げますとともに、明主様のお導きのもと、全く新しい段階に入られた㋾之光教団の充実と成長を願い、岡田真明教主補佐を力に、明主様のみ心にお応えできるよう、弛まぬ精進を重ねてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、誠に畏れ多いことではありますが、私どもが天地万物一切の創造主であられる唯一の神・主神を‘神様’とお呼びすることができるのは、主神が私どもをすべての始まりの天国においてご自身の分霊（わけみたま）として生んでくださ

ったからであると思います。
　主神は私どもを生んでくださった親なのです。
　親であるからこそ、‘神様’とお呼びすることを赦してくださっているのではないでしょうか。
　主神が私どもの魂の親であり、私どもの中で生きておられるということ、この厳然たる事実を認めることができるようにと、主神は、信仰という言葉と営みを用意してくださったと思います。

　明主様は、本教をご立教になる以前の昭和５年、ご自身の歩んでこられた道のりを振り返られ、『私の歩んだ信仰生活』と題する手記をお書きになっておられます。
　私は、その手記を拝読し、心を大きく動かされました。
　それによりますと、明主様は、皆様ご存じのように、大変貧しいご家庭で育てられ、お身体の弱い少年であられました。情熱をもって学び始められた画家への道も、目の病のために途中で断念せざるを得ませんでした。その後も次から次へと病にかかられました。
　明主様は、そうしたご自身の境遇を振り返られ、「すっかり人生を悲観しました。生きているのが嫌になりました」と記(しる)しておられます。
　その後、小間物商を始められてからも、一時は成功するものの、まもなく経済的に困窮状態に陥り、それだけではなく、大切なご家族に先立たれるという、大きな悲しみ、悩み、苦しみに遭遇されました。
　そうした中で、何か大きなものが明主様のお心を捉えました。
　この時のご心境の変化を明主様は次のように明かしておられます。
　「勃然と、私の心はこの時信仰を求めました。信仰！信仰！信仰によるよりほかは、心の悩み、身の悩み、生活の悩みは救われる道がないと思いました。深く、深く、人生の無情が氷の壁のように私の心も身も包んでしまったのです。せめて、信仰の暖かい光を頭(こうべ)の彼方の空のどこかに仰ぐだけでも仰ぎたかったのです。
　それだけでも私には救いとなりました」と記しておられます。
　私は、明主様の、信仰の暖かい光を仰ぐだけでも仰ぎたかった、それだけでも私には救いとなったという、この一文に触れさせていただいた時、大きな衝撃を覚えました。
　明主様は、人生の無情を強く感じられる中で、神様と救いがご自身の中で確かに存在していることを、例えようもない感激をもって発見されたのではないかと思います。

私どもは、信仰という言葉をよく使わせていただきますが、明主様が信仰という言葉を通して、私どもに何を教えてくださろうとしておられたのか、また今もおられるのか、ということを、よくよく考えてみる必要があると思います。

このようにして、信仰の道に入られた明主様は、困難な生活状況について案じながらも、ご自身は、「心の底の底には燃えあがっては噴きあげる信仰への強いゆるがない信念があり」、「常に神に守られているという強い信念は私をびくとも脅かしませんでした」と述べておられます。

その後、明主様は昭和１０年、本教をご立教になりますが、それは、ご自身の中に宿る救いに出会われた感激と信仰への燃え上がる情熱を、ご自身だけのものとするのではなく、多くの人々と分かち合わずにはおられないという強いお気持ちからであると思います。

明主様は、ご立教後も、新宗教に対する警察当局の取り締まりや弾圧、ご法難など、数々の試練や困難を経験されますが、明主様の強い信念と情熱は、どんな時にも決して揺らぐことはなく、常に明るく前進されました。

私どもは、現在、数々のみ教えやお歌に触れ、様々な取り組みや活動に参画し、聖地に集わせていただいておりますが、それらすべての中心には、明主様が絶望のさなかに、大きな感激をもって出会われた主神に対する強い信念と情熱が貫いていることを常に心に刻ませていただきたいと思います。

明主様は、ご晩年の昭和２９年、脳溢血で倒れられますが、その時も、当初の信念と情熱は決して揺らぐことはありませんでした。

そして、その重大な病のさなかにあっても、「ずいぶん若くなってるよ私の方は」と仰せになり、ご自身の中で「メシヤが生まれた」という事実を大きな喜びをもってご発表になりました。

明主様がお説きになりましたように、主神は、私ども人間をご自身の分霊として生んでくださいました。

その主神は、ご自身の分霊すべてに、主神の子という立場をお与えになりました。

私は、私ども一人ひとりに持たされている、この主神の子という立場こそ「メシア」という御名で呼ばれている立場であると思います。

明主様は、お若い頃、絶望のさなかに主神に出会われました。

そして、ご昇天を前にしたご晩年、その主神が、魂の親であることを確信されました。

だからこそ、明主様は、魂の親のみもと、すなわち、天国に勇んで立ち返

られた、と私は信じております。
　主神は、ご自身の天国に立ち返ってきた明主様を、かけがえのない子供として喜んで迎え入れられたのではないでしょうか。
　そして、「メシア」という御名を帯びた分霊を、明主様に、もう一度新しく、お与えになられ、永遠の命をお授けになられたと思います。
　それを明主様は、新しい命としてお受けになられたからこそ、明主様は、「ずいぶん若くなってるよ私の方は」と仰せになり、「新しく生まれる」、また、「メシヤが生まれた」とお感じになられたのではないでしょうか。
　私は、この時の明主様の感激は、いかばかりであったろうと拝察する他ありません。
　しかしながら、私は、この時のメシアが生まれたという感激と、お若い頃、絶望のさなかに主神に出会われた時の最初の感激とは、ひとつであると思えてなりません。
　私どもには、明主様と出会い、信仰の道に導かれた時の感激があるはずです。
　その感激は、たとえそれが小さなものであったとしても、明主様の感激とひとつであると思えてなりません。
　明主様とひとつに結ばれた私どもは、たとえどんなに辛く苦しいことがあっても、メシアが生まれたという感激と溢れんばかりの喜びが自らの中心に存在していることを信じさせていただきましょう。
　そして、メシアという御名を帯びた主神の分霊がますます光り輝きますよう、明主様と共に、魂の親である主神にお仕えし、すべてを主神の栄光として帰させていただきましょう。
　ありがとうございました。

以　上